

地球^{ゼロ}年

—日本自衛隊アメリカを占領す—

矢野 徹

立風書房

地球0年

—日本自衛隊アメリカを占領す—

矢野 徹

立 風 書 房

地 球 ^{ゼロ} 0 年

¥ 420

1969年 4月20日 初版発行 検印廃止
1969年12月 5日 再版発行

著 者 © 矢 野 徹
発 行 者 能 見 正 比 古
印刷・製本 凸 版 印 刷 株 式 会 社

発 行 所 立 風 書 房

東京都品川区旗の台 6 の 29 の 10
電 話 東 京 (786) 6561 (代表)
振 替 東 京 7 4 4 9 3 ㊦ 141

落丁・乱丁本はお取替えいたします。 0093-21509-8909

目 次

1. 灰色の海が	5
2. ドゴロスキー少佐	16
3. 長野県駒ヶ根市	33
4. 岩佐二佐は	55
5. 十五時、ヘルメット	71
6. 十二月二十四日	80
7. 死者の呪いが	87
8. 暗雲が低く	98
9. 一月二十七日	112
10. そのころ、馬場	134
11. そのわずか	146
12. CBR兵器の	156
13. 午後十一時	168
14. そして四十分	178
15. 頬を撲りつけ	197
16. 恐怖はふきつけ	207
17. 二時間後、派遣	220
18. 西に遠く離れ	227
19. 「隊長、サンフラン	235

装幀・イラスト …… 山野辺進

長編SF

地球
0^{ゼロ}
年

——日本自衛隊アメリカを占領す——

灰色の海がつづいている。

そして、どんよりとした鉛色の海。

バンクーバーから東京をむすぶ線上を、ボーイング999型旅客機ハシテイ・オブ・トウキョウVが、マッハー・四で飛んでいる。一秒にほぼ四百七十メートルというスピードだ。自衛隊で使っている自動拳銃の初速が毎秒二百五十メートルというのだから、マッハー・四はたいへんな速さだ。しかし機内は静かで、すこしの震動も感じられない。座席のポケットに入っている宣伝用パンフレットにもハ999のテーブルにおいたカクテル・グラスには、さざ波ひとつ立ちませんVとある。

前から十三番目の右側に坐っている日本人青年は、紺の背広の膝にニューヨーク・タイムズをひろげている。だが、新聞を読んでいる様子はない。その下にある黒いアタッシェ・ケースを隠しているのだ。最新式M92ライフル、つまり超小型原爆カルフォルニウム弾を発射する小銃の設計図が入っている。弾丸の秘密はまだまだ明かされないのだろうか、小銃のほうだけひと足さきに解禁になったのだ。とはいえ高度の秘密であることに変わりはない。

青年の名は馬場一平太。現在の身分は極東通商の社員ということになっているが、本当は極秘書類を運ぶ伝令使で、陸上自衛隊の情報部員だ。だから、万一の場合をおもんばかって直通便ではない旧型の

スピードが遅い999に乗っているのだ。

馬場の眼は、見るともなくニューヨーク・タイムズの紙面を追っていた。

米・ソともに月世界軍用基地ロケットの軟着陸に成功……上院軍事委員長は偵察衛星の増加を要求……ケネディ暗殺に外国勢力の援助ありと言明……ソ連軍の中国国境集結は中ソ戦を意味するか……北朝鮮原子戦部隊と中国原子力潜水艦の動きが意味するもの……原子力空母の海水汚染におののくヨコスカ……ゼンガクレンに死者五十三名……

“どうして人間は、いがみあいを続けるんだろう？”

馬場はぼんやりとそう考え、苦笑した。

“おれだってクリスマスだというのに、核兵器の設計図を運んでいるんだ……彼女が知ったらどう思うだろう？”

その考えは耳もとで甘ったるく響いたアルトの英語に中断され、馬場はどきりとした。

『お飲みもの、いかがですか？ カクテルでも……』

すらりと伸びた肌のストッキング。ひどく短いスカート。膝上二〇センチというところだろう。赤味がかった金髪のスチュワードレスだ。ふくよかな頬にできている深いえくぼ。全くの職業意識からだけとは思えないその笑顔。ほのかに漂ってくる香水の甘い匂い。

馬場は理由もなく顔を赤らめた。白い肌の美しい女性、それが西欧の言葉をしゃべる相手だと、どうもうまくない。そういうのが前にくると、いくらつまらぬことだと自分の心に言いきかせても、わけの

分らぬ圧迫感をおぼえ、それと平行してかすかに、憎しみに隣りあった憧憬をおぼえるのだ。それはどうも、平均して圧倒的なプロポジションを持っているかれらの肉体のせいらしい。語学の勉強に苦しい思いをしてきたからかもしれないが。

『いや結構……あとどれくらい？』

『九十分ほどでハネダ着でございます』

見せつけるつもりなのだろうかと思うほど、その張りつめたヒップをくねらせて去ってゆくスチュワーデスの後ろ姿を馬場はじっと見つめた。そのひき締まった曲線が、別の曲線を連想させる。東京にいる恋人の節子だ。飛行機事故がおこななければいいがと心配ばかりしている彼女。

「もうすぐ……」

思わず呟いた馬場の顔を隣に坐っていた老人がちらりと見て、新聞の広告に眼をうつしながら言った。
「そう。あと一日でイブ……」

「え？ ええ」

馬場は窓の外に視線をうつした。

西の空が赤く染まりかけていた。海面にはもう夕闇が訪れているだろう。馬場はその赤い空になぜか不吉なものを感じた。キリストが流した血を連想したのだ。クリスマス・イブ、キリスト、赤い空、血というような単純な連想だったのだろうか。

そのころ、氷に閉ざされた北極海の一点、ベーリング海峡と北極点を結ぶ線をすこし西にはずれた氷

原の一角に、まるで奇蹟のような黒い海面がわずかにのぞいていた。

そしてその海面下には、アメリカ海軍の攻撃型原子力潜水艦ハエンゼル・フィッシュⅤが浮上の時を待っていた。

艦内調理室ではコックのスミスが横須賀で買ってきたマルコム・ネスビッツのすさまじい本を、目を輝かしながら読んでいた。

『おう聞けよ……おれは舌を前後にゆっくりと動かした……どこをどうしてるかわかるか……彼女はあるえておれの頭をぐいぐい締めつけるんだな……まったく日本よいとこ、一度はおいでだ』

『馬鹿野郎、たまにはまともな本でも読みやがれ！』

『なにを、おめえだって、横須賀で売りつけられた写真ばかり、にらんでやがってよ』

のんきな連中だった。自分らのすぐとなり死神が同居していることなど念頭にないのだ。いや、かれらだけではない。その潜水艦に乗りこんでいる全員が、死神の眠りを覚ますことなどは考えていなかった。かれらの頭の中にあるのは、こんど上陸したときにどんな遊びかたをしようかということだけだった。酒と女と、女と酒と……。

だがその丸い胴体には十六本の核弾頭中距離弾道弾ネオポラリス・ミサイルが、ひっそりと格納されて発射の時を待っていた。一発で高性能火薬百万トンの威力——ジョージ・ワシントン級ポラリス潜水艦、グアム島アプラ基地にある第十五潜水戦隊に所属する排水量五千九百トンのハ天使の魚Ⅴだ。

そんな優しい名前をネオポラリス・ミサイル潜水艦につけるのは、かつて長崎へ原爆を落としたB 29爆撃機にハ偉大な芸術家Ⅴなどというふざけた名前をつけたアメリカ軍の伝統なのだろう。

ペリスコープ・ルーム

潜望鏡室のすぐうしろに、この艦の神経中枢ともいえる航法室がある。ここで整えられる多く

のデータが、^{イナージェナル・ナビゲーション}天使の魚Vの慣性航法装置とネオポラリス・ミサイルの飛行装置に与えられ正確に作動させるのだ。山のような^{エレクトロニクス}電子装置が現在の位置を示し、四十二台もの^{コンピュータ}電子計算機が自動的に動きつづけている。

戦闘情報士官バー

戦闘情報士官バーンスタイン少佐は、副長グローバー少佐をちらりと見てから言った。

『艦長、十六時二十七分です』

大男のハマー中佐はすぐに命令した。

『浮上、潜望鏡深度！』

艦長の声は緊張していた。夏の北極海とちがって、冬の北極海にあって、冬の不凍海面はほんの少しだ。そして、ごくせまい。そこへ浮上していったら、いつまわりから押し寄せてくる氷山に押しつぶされてしまいか分らないのだ。

三十分後、巨大な氷山と氷原にとりかこまれたせまい海面に、小さな潜望鏡がゆっくりとつき出ている。

黒い北極。黒の支配する冬の北極だ。黄、緑、赤と、あざやかなオーロラが乱舞し、分秒ごとにその形を変えている。風速は二十メートル、粉雪が吹きつけている。ずんぐりした司令塔の上部がわずかに現われた。まわりは黒、黒、黒。黒い氷の世界だ。

『対空レーダー、感度あり！』

レーダー係の緊張した報告に、すぐ次の声が響く。

『味方識別信号、入りました!』

はっとした空気の中を、通信士官が艦長を呼び、中佐はすぐ通信室へ入っていった。

『艦長、緊急連絡です!』

ハマー中佐のがつしりとした手が送受話器をつかんだ。

『ハロー、こちらはポラー・シャーク。天気はどうだ? ハロー、ハロー、こちらポラー・シャーク』
空電が激しくスピーカーに入る。そのひどい雑音にまじって飛行機からの声が響いてきた。

『ポラー・タイガーよりポラー・シャークへ。ポラー・タイガーよりポラー・シャークへ……
昼の献立をつたえる』

中佐の頬がびくりと動いた。まわりの士官も緊張した。新しい作戦命令をつたえるという暗号だ。

『通信士、閉鎖回路にして、録音機をまわせ』

と、ハマー中佐は命令した。

これで艦長以外の者はだれひとり作戦命令を聞かれなくなった。中佐が待ちに待った瞬間だ。この好機を利用して、祖国アメリカに対する永遠の恐怖を無くすのだ。中共のソ連攻撃が始まったと思わせる工作活動はすでに着手しているはずだ。

ハマー中佐のレシーバーがひどい雑音とともにパイロットの声を響かせた。

『待機地点をはなれ、グアム島に帰投せよ……ポラー・タイガーよりポラー・シャークへ。くりかえす……』

中佐は眉をひそめ、レシーバーを押さえた。そして耳から聞こえてくる言葉とは全く関係のない言葉

を口から出し、ボールペンでその言葉を書きはじめた。

九七〇……〇四二五、一七三八……

中佐は手をとめて答えた。

『了解……みんなよろしく』

その眼がキラリと輝いた。レシーバーをはなした中佐は通信士に言った。

『そのテープをはずしてくれ』

『イエッサー』

通信士は何とも思わずに録音機からテープをはずした。交信テープをはずすという異常な行動に全く疑念をはさまなかったのだ。それは日頃からハマー艦長の人格に敬服しその命令には絶対服従する癖がついていたからでもあり、冬の北極海浮上という危険をおかしている最中でもあったからだろう。

テープを受け取った中佐はマイクを握って言った。

『バーンスタイン、艦長室へ暗号書を持ってすぐきてくれ。九七〇で始まっている』

テープを持った中佐は自分の部屋へ急いだ。ドアをしめるその手がふるえていた。中佐は通信室から持ってきたテープを金庫の中へしまい、別のテープを取り出した。秘密のうちに作っておいたテープだ。

金庫をしめてソファに腰をおろすと同時にドアがたたかれ、戦闘情報士官バーンスタイン少佐が入ってきた。

『遅くなりました、艦長。特別暗号書でしたので……』

『いいよ……電文はこれだ。昼の献立を伝えるところか言っていたが……』

ハマー中佐はボールペンで走り書きした紙片を見せた。

急いで暗号書をひらき、その文字をつきあわせていた戦闘情報士官の顔がみるみる青ざめこわばってゆき、暗号書をばさっと床に落とした。解読した文字を書く手がこきざみにふるえている。

『艦長！』

ハマー中佐はその解読文をちらりと見るなり、マイクをにぎってどなった。

『乗組員に告げる。こちら艦長。全員戦闘配置につけ。ミサイル係士官、全ミサイル発射用意！ グローバー、艦長室へ！』

すぐに副長が飛びこんできた。

『読め、グローバー』

副長は声をあげて読んだ。

『これは演習にあらず。アメリカ合衆国大統領の命により、各ポセイドンおよびポラリス潜水艦は、Q作戦命令書にもとづき行動を開始すべし。神よ、われらを許したまえ……』

副長グローバー少佐は青い顔を艦長にむけた。

『艦長ひとりで受けられたのですか？』

その口調には詰問の色があった。

ハマー中佐はうなずいて机の上をさした。

『録音したテープがある。聞くか？』

少佐はうなずいた。

『よし。その前に』

ハマー中佐はマイクにむかって、たたきつけるような口調で命令した。

『ミサイル係士官、安全装置をはずせ！』

スピーカーが驚いた声を響かせた。

『艦長？』

『これは演習ではない！』

戦闘情報士官は艦長室の小型録音機にテープをかけた。やがて、ひどい雑音が響きはじめた。

『ポラー・タイガーよりポラー・シャークへ……昼食は中国とロシア料理。その献立はつぎのとおり……九七〇……〇四二五、一七三八……ほかの連中によろしく。わかったか……こちらポラー・シャーク、ポラー・タイガーへ。復唱するぞ……九七〇……〇四二五……』

中佐はきびしい眼をむけた。

『バーンスタイン、グローバー、間違いないな？』

『間違いありません』

三人は顔を見あわせ、つぎの瞬間、ドアをあけて飛びだしていった。

机の上ではソニーの小型録音機がまわりつづけていた。

『了解……ポラー・シャークより、ポラー・タイガーへ……』

ハマー中佐以下三人は攻撃指揮室の金庫へ走り、その重い扉をひらいた。大型の封筒がならんでいる。それぞれの中に作戦命令書がおさめられているのだ。

『L、M、N、O、P、Q……これだ!』

封筒を破った艦長は急いでその文章に眼をとおし副長グローバー少佐にわたした。

△各艦は、攻撃下令時における位置識別符号により、その関係ページに示しある敵目標を攻撃すべし▽
副長の全身はこきざみにふるえはじめた。戦争はこんなにも思いがけず、あっさりと始まるものなのか!

『航海長、現在の位置符号は?』

そうたずねるハマー中佐の唇は、びくびくとひきつっていた。

『M1です、艦長。MANのM、ファーストのワンです』

ハマー中佐は急いでM1のページをめくった。

攻撃用海図は、日付変更線を0とし、北極を中心にして右まわりに円を三百六十等分し、北極から北緯六十度までをAからZまで二十六に分けている。だから北極海のどの地点も九千以上の小さな扇形^{セクタ}区分に分けて示せるのだ。

M1というと、ベーリング海峡を通して北極海に入り、ランジェル島から北極に四百キロほどむかったあたりとなる。ポラリス潜水艦は、水爆弾頭ミサイルをそこから四千五百キロ以内の場所へ正確に落とせるのだ。

『攻撃目標は、アナドイル、オハ、コムソモリスク、ノルドヴィグ、タイミナール、イルクーツクの各ICBM基地です、艦長……やはりロシアは中国と手を握りやがったんですね!』

バーンスタイン少佐は泣き出しそうな声で報告するなり、航法室へ走った。